

童話の空想

檉 葉 勇

人類の夢

人間はだれでも、必ず欲望をもっている。こんなものがほしい、こうありたいなど、何か欲望をもたない人はひとりもあるまい。たとえば、あらゆる欲望をすてたという隠者であっても、生きているからには、全く欲望をすてきつていないのである。

その人間の欲望の中で、全人類の全く手の届かぬところにあるものが空想である。

しかし、空想がいつまでも空想として残るとは限らない。ある時代に空想と考えられたことが、時代が移るとともに、空想でなくなることがいくらかもある。

街角のガソリンスタンドに、空を飛んでいる赤い翼をもった天馬のマークを見かけることがあるであろう。これは、ギリシャ神話に出て来るペガサスという馬で、詩の神さまが乗ったといわれている。こんな天馬の神話が生れたのは、古代ギリシャ人が、鳥のように空を飛ぶことができたという夢をもっていたからである。しかし実際に飛ぶことができないので、天馬の空想をえがいたのである。ところが、こんにち、空を飛ぶことを空想だとして笑うものはひとりもないであろう。

五〇年前なら、月世界旅行は、単なる空想に過ぎなかったであろうが、今はもう夢ではない。

もし人類が、現実の生活に満足して、夢を抱くことがなかったら、人類の進歩がなかったかも知れない。とすると童話の中のいろいろの空想も、単に荒唐無稽として葬り去ることはできないであろう。むしろ、子どもの夢を正しく育てることが望ましいのではあるまいか。では童話の中に、どのような空想が宿っているであろうか。

食物に関する空想

人間は生きて行くために、食うということほど切実なものはない。食欲はあらゆる欲望に先立つものである。だから、童話の中に食物に関する空想が多いのも当然である。

おいしいごちそうを、腹一杯たべられたらという願望はすべての人類に共通である。犬、猿、雉は、日本一のきびだんごにつられて桃太郎のお供をした。舌切雀のおじいさんは、雀のお宿を訪ねて、雀おどりを見物しながら、珍しいごちそうに舌鼓をうった。猿蟹合戦の原因は、にぎりめしや柿で、食糧問題である。

グリム童話の中に、だれでも知っているヘンゼルとグレーテルの話がある。ヘンゼルとグレーテルは兄妹であるが、家が貧しくて山にすてられる。二人は家へかえる道を見つけないで、山の中をさまよい歩いているうちに、お菓子でできた家を発見する。柱も窓も屋根も、みんな菓子でできている。子どもにとって、こんなすばらしい家はない。さみしい山の中で迷い子になったという恐ろしさなんかすっかり忘れて、その家をボリボリ、パリパリかじった。この童話を、子どもに話してきかせたら、子どもは思わず舌なめずりするであろう。

このおいしいものを食べたいという欲望は、一歩進んで、食べたいときに、ほしいものを何でも出せるようなものがあつたらという空想に発展する。同じグリムに、こんな童話がある。

三人兄弟があつた。両親が死んでしまったので、幸運を見つけるために出発する。するとまもなく銀の山があつ

た。一番の兄は、幸運を見つけたといって銀のかたまりをもってかえったが、あとの二人は、なお旅をつづけていると、こんどは金の山にぶつかった。二番目の兄は、喜んで金のかたまりをもちかえった。一番末の弟ヤコブは、もつと歩いて行つたが、疲れたので、道ばたの木の下で休んだ。

あまり腹がへったので、思わず、

「ああ、何かたべたいな」と叫んだ。すると、ヒラヒラと、木の上から落ちて来たのが一枚のテーブル掛、ヤコブの前にひろがったと思うと、その上に、山海の珍味がならんでいる。

ヤコブは大喜びで、腹一杯ごちそうをたべ、テーブル掛をたたんでポケットに入れ、どこともなく歩いているうちに、山の中で日が暮れたので、宿を求めていると、小さな炭焼小屋があつた。

一夜の宿を乞うと、炭焼おじさんは、

「泊めては上げるが、食うものがない」という。そこでヤコブは、テーブル掛をひろげて、ごちそうを出して見せると、おじさんはびっくりして、ぜひ自分のもっている宝物と取りかえてくれというので、交換が成立する。

その宝物というのは、古ぼけた背囊であるが、たたけばただけ兵隊が出て来て、命じたことは、何でもやってくれるという重宝なもの。翌朝テーブル掛をおいて小屋を出たヤコブは、途中で背囊をおろし、ポンポンたたくと、兵隊がとび出して来たので、

「炭焼小屋において来たテーブル掛をとりもどして来い」といいつけると、たちまちテーブル掛をとりかえして来た。

二番目の炭焼小屋では、同じようにして、まわせば大砲の弾丸がとび出すという帽子を手に入れ、次には吹けば城でも塀でも崩れおちるという角笛と交換し、三人で仲よく使ってくれといって、テーブル掛は、炭焼に与え、三つの

宝物をもって、自分のうちへかえって来る。

財宝に関する空想

こんな話をきくと子どもたちは、そのテーブル掛から、どんなごちそうを出そうかと、思いを走らせるかも知れない。しかし人間の欲望には限りがない。ほしいときに、思う存分おいしいものをたべられるだけでは満足しないで、更に金銭財宝への欲望がはたらいで、童話の中に、宝物の空想が生れて来る。

桃太郎は、鬼ヶ島から宝物をもってかえって来るし、花咲爺さんは、「ここ掘れワンワン」と飼犬の知らせで宝物を掘り出し、舌切雀のおじいさんは、雀のお宿へ行って宝物のつづらをもらって来る。

アンデルセンの童話の中には、ふしぎな燵箱の話があるが、その燵箱をこすると、三びきの犬が出て来る。その一びきの犬は銅貨を、次の犬は銀貨を、次は金貨を、ほしただけいくらでも、もって来るのである。このように、財宝つまり富に関する空想は、世界の多くの童話の中に見出すことができる。

権力に関する空想

童話の中には、権力に関する空想も甚だ多い。子どもは本来お山の大将、自己本位で、いばってみたいのであるから、自由に権力を振るうことのできる童話の空想に共感を覚える。

自分と同じような子どもである桃太郎が、鬼ヶ島の鬼共をこらしめる、指に足りない一寸法師が、大きな鬼共を、わけなくやつつける、子どもにとって痛快至極なことである。前にあげたグリムの三つの宝の如き、子どもの権力欲を満足させる典型的な空想である。

テーブル掛を、三人炭焼に与えて、背囊と帽子と角笛をもつて自分のうちへかえったヤコブは、ボロボロの着物で、乞食のような姿をしていたので、さきにかえって大金持になっていた兄たちに追払われた。そこでヤコブは、背囊をたたいて兵隊を出し、兄たちをこらしめた。すると兄たちに味方をした王さまが兵隊をさし向けたが、ヤコブがいくらでも兵隊を出し、王さまの軍勢をやっつけたので、王さまは和を請い姫を与える。

ところがやがて姫は、背囊の秘密を知り、こっそり背囊を盗んだが、ヤコブは帽子の力で勝ち、おしまいに角笛を吹いて、王さまの城も兵隊も吹き飛ばしてしまう。この童話をきく子どもたちは、思わず喜びの声をあげるであろう。では、なぜ子どもが、このような童話を喜び迎えるのであろうか、その理由の一つは、童話の中の権力の空想が、悪いものをこらしめるために働いているからではあるまいか。子どもは正義感が強いので、童話の中でも、悪が勝ち、悪が栄えることは、ぜったいに許さない。殊に小さいもの、弱いものが、何かの力によって、悪に打ち勝つことが、うれしくてたまらない。ここに教育的意義がある。

五人の家来

桃太郎という自分たちと同じくらいの子どもが、犬・猿・雉の助力によつて、強暴な鬼を征服するのだから、子どもにとって痛快至極である。ヤコブ少年も、三つの宝の力によって、無慈悲な兄たちや、これに味方する王さまをこらしめるのだから、子ども自身がヤコブになって喜ぶのである。外国には類話がきわめて多い。もう一つドイツの童話をあげてみよう。

ジャック（ドイツにはこんな名はないであろうが）という少年が、山の中を歩いていると、幾抱えもあるような大木を、何本も手で折って、その一本を縄にしてしばっている力の強い男がある。

この男がジャックのお供をして行くと、鉄砲で何かねらっている男がある。何をうつのかときいたら、「十軒先の木の葉にとまっている」蠅の左の目玉をねらっているという。この目の鋭い男も、ジャックの家来になる。

次には、両足ではあまり速過ぎるというので、片足をついで来る男、四番目には、まっすぐかぶると、まわりが冷たくなるというので、帽子を横つちよにかぶってる男、おしまい、鼻の息で、十キロ遠方の風車をまわす男、みんなジャックの家来になってお供をする。

都に入ると、王さまのお姫さまと競争して勝ったものを、ムコにし、国を半分分けてやるという立札を見たので、お城へ乗りこんで行く。

足長がお姫さまと競走、ずっとお姫さまより先に走ったが、途中で休んで石を枕に眠ってしまった。それを見たのが目の鋭い男、鉄砲で足長が枕にしている石をうったので、足長は目をさまし、競走は勝利である。

ところが王さまは、六人をだましまわりが鉄でできている部屋に入れ、外から火を焚いて焼き殺そうとしたが、帽子の男が、帽子をまっすぐかぶったので、みんな寒くてふるえだした。

王さまは失敗したので、「城にあるもの、みんなやるから許してくれ」という。すると力の強い男が、町中の反物を買いしめて大きな袋を作り、お城へすっぽりかぶせて引っぱった。お城がずるずる引かれていくのを見た王さまは、びっくり仰天、何万という兵隊をさし向けて、ジャックたちを攻めて来た、そのとき、息の強い男が、片方の鼻をおさえて、プーと一吹きすると、お城も兵隊も、木の葉のように、どっかへ飛び散ってしまった。約束を守らない王さまは、少年ジャックのために、わけなくやつつけられてしまったのである。この童話をきく子どもたちは、自分もこんな家来があつたらと思うにちがいない。

桃太郎と比較

この童話は、よく日本の「桃太郎」と比載されるのであるが、どちらも家来をお供にしていることは同じであつても、その空想が、ドイツの童話の規雄大、自由奔放なものに比して、「桃太郎童話」のなんとけち臭いことか。

犬はかみつくだけ、猿はひっつき、雉はつつく、めいめいの特性が出ているといえはそれまでだが、すこぶる現実的で、ちつとも童話的空想がない。国民性の相異というべきであらうか。

もしかりに、桃太郎がドイツで生れたとしたら、こんな童話になつたかもしれない。

桃太郎が犬猿雉を相伴にして鬼ヶ島征伐に出たが、浜辺まで行つたところ島へ渡る船がない。先ず黍団子をたべて、どうしたらよいかと思案していると、雉はたちまち飛行機のように大きくなり、桃太郎と犬と猿を乗せてほんの一飛び鬼ヶ島へ着いた。

鬼の城のそばまで行くと、犬は一声ウオーと大きく吠えた。すると城がゆらゆらゆれたので、鬼共はてんでに鉄棒をかついで、城から飛び出して来た。何しろ鬼は大軍、桃太郎軍の旗色がよくない。このとき、猿が、自分のからだの毛をぬいてプーと吹くと、それがみんな猿の兵隊となつて、鬼兵をさんざんやつつけた。大将の桃太郎は、もちろん大活躍をして、悪い鬼共をこらしめた。

ずいぶん、突飛な空想であるが、何しろおばあさんが、心をこめて作つた日本一の黍団子のおかげだから、このくらいの魔力が生れたのは当然であらう。ただし、これは私のえがいた空想である。

以上、童話の空想の二、三について述べて来たが、その他に、魔法に関するもの、変身に関するもの、別世界に関するものなど、いろいろな空想がある。

いかにもばかばかしいように思われるこれらの空想の多くは、結局人類の願望のあらわれで、人類の進歩を促す力ともなつたことが少くない。荒唐無稽として子どもから、空想豊かな童話を奪いとらないようにしたいものである。